

ライフサイエンス領域の研究者における メディア利用実態と意識

松林麻実子

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科・講師

近年、国内外を問わず、ライフサイエンス領域の研究者を対象とした情報メディア利用実態調査が数多く行われるようになってきている。これは、他分野に先駆けてコンピュータ化や電子ジャーナル化が推進されており、昨年米国において NIH の助成を受けた研究の OA 化が義務付けられるなど、ライフサイエンス領域における学術コミュニケーションが最もドラスティックに変化していることに起因する。学術コミュニケーションを研究する者にとってライフサイエンス領域とは大変魅力的なフィールドであると言えよう。

ここでは、国内で行われたものを中心にライフサイエンス領域の研究者におけるメディア利用実態調査の結果を紹介し、全体を通じて見えてくる研究者の動向について論じる。これらの調査が共通して取り上げているのは、下記の 3 項目である。

- [1]電子ジャーナルを中心とする電子メディアの利用度：電子ジャーナルは研究者にとってもはや当たり前のものとなりつつある。それに加えて、大学や研究所が作成しているサイトも情報源として一定の評価を得ているように思われる。
- [2]情報検索の頻度・使用データベース：一日に複数回実施するという回答も一定数見られており、かなりの頻度で情報検索を行っていることがわかる。使用データベースとしては PubMed が圧倒的多数を占めるが、直近の調査結果によれば、Google も無視できない程度の回答を集め始めている。これを、ライフサイエンス領域においてオープンアクセスが進んだ結果と見ることができるかどうか。
- [3]オープンアクセスに関する意識：理念として知っている、賛同する、という回答は増加傾向にあるが、実際にオープンアクセスを実践している研究者は非常に少ない。

現在公表準備中の研究成果を含むため、ここに詳細を記すことはしないが、当日はより具体的な数値を出しつつ論じる予定である。

【講演者プロフィール】

松林麻実子（まつばやし まみこ）

2001年3月、慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士課程単位取得退学。
2002年10月より現職。専門領域は情報行動論および学術コミュニケーション論。主な論文に“The current status of Open Access in biomedical field : the comparison of countries relating to the impact of national policies”(ASIS&T2006), “e-print archive という情報メディア：日本の物理学研究者への利用調査に基づいて”（日本図書館情報学会誌, Vol.51, No.3, 2005）などがある。